

# 中国における老人の生きざま

北 崎 耕 堂

(佛敎大学講師)

## は じ め に

高齢化社会に対する関心が高まって、老後の生活問題は今や社会問題となってきた。このことは、ひとりわが国の問題だけにとどまらず、お隣りの中国においても社会問題としてクローズアップしてきている。一九四九年の南京、上海の解放にはじまり、同年一〇月には中華人民共和国が成立している。解放前の中国人の平均寿命をみると、四〇歳程度であったと推定することができる。しかし今日では、男性が六九・八一歳、女性は七二・四六歳にまで延びてきている。この年齢は、わが国の二〇年ほど以前の平均寿命と似ているといえるが、中国の総

人口を約十億として、公式の発表によると、六五歳以上の人口の占める割合は約六％にあたる。このことからしても、わが国やヨーロッパのそれに比べると老齡化とはいえないかも知れない。

だがしかし、中国の今日の人口増加の実態からして、産児制限をしなければなくなってきたことから推しても、次第に高齢化する社会を予測していることも事実である。したがって、問題は多くなってくる老人たちが、老後をどうして暮らしていくかという、いわゆる切実な問題が生じていることである。

もちろん、安定した老後を過ごすためには、経済的な面での安定と精神的な安定、さらには健康と生きがい

問題、これらの四つの条件が必要であることはいまさらいうまでもない。

この稿では、まず定年退職制度に端を発して、退職後の老人たちの福祉施設の現状はどうなっているのか。さらには老後の保障という観点に立脚して、老後の三大不安といわれている経済、医療、孤独といった面からの考察を加え、中国における老人たちの生きざまを通して、ようやく立ちなおってきた中国伝統の美德のなから、老人は尊敬されるという点を踏まえて論述してみたい。

### (一) 定年退職制度のこと

定年退職のことを中国では「退休」と称して、いわゆる退職休養を略したものである。これが制度化されたのは一九七八年、國務院が「第一〇四号文件」として規定したものである。この規定は、国营企業の労働者（肉体労働者をさしており、中国では「工人」と称している）と職員の定年退職規定である。

それによると、労働者の場合男子は六〇歳、女子は五〇歳で定年となるので退職することになっている。職員

の場合、幹部になると男子は六〇歳であるが、女子は五歳で退職することになる。また、飛行機のパイロットやスチュアデスのように高空業務に従事するもの、あるいは高・低温のところでの特別な労働に従事する労働者の場合は、あらゆる面からの消耗度を考えて、男子が五五歳、女子は四五歳を定年としている。

なおこの定年退職規定の年齢は、一般も幹部の場合も目下のところ一応のメドであって、必ずしも強制的なものではない。だからこの規定の実施もゆるやかで、事情によっては、当人の希望で退職年齢が早められたり遅められたりする。しかし、この定年退職の問題は世界各国がそうであるように、決して単純なことではない。それは、物、心、健康、家族関係などさまざまな条件がからみあっていて、一つの条件だけでは割りきれない問題である。とくに中国の場合は、地域が広大であるばかりでなく人口も膨大だから、状況もまちまちの様相を呈している。したがって、定年退職に対する人びとの対応の仕方もさまざまで、制度の運用も前述のようにきわめて柔軟性をもっている。

そこで、入手した資料によって定年退職後の人びとの実情を簡単に紹介してみたい。このことにも二つのタイプがある。その一つは進んで退職しようとする人たちであり、他の一つは、定年になっても退職したくない人たちである。

前者の進んで退職しようという人たちのなかには、第三項で述べるように、基本的な生活が保障されているということと、再就職が約束されているということである。前述したように、国营企業を退職した人たちは、集団所有制の企業に再就職する道が開かれているし、最近公認されるようになったといわれる修理業、飲食業などの個人営業を営んだりしようとする人たちもいる。いずれの場合も、たとえ他の収入があっても退職手当は毎月支給される制度になっているから、収入が増えて経済的な面での暮らしは一層よくなるはずである。

後者の定年になっても退職したくない人たちの場合は、その理由もこれまたいろいろで、その一つはやはり生活の問題である。あまり多くない収入が何割か減少するので困るということと、子どもがまだ小さかったりす

れば事はなおさら深刻である。また、なかには退職手当はあるにせよ、退職してしまうと現役当時にあった有形無形の便宜が失われるので、どうしても退職したくないという人たちもいる。

さらにいえることは、物質的な原因だけではなく、それまでやってきた仕事に愛着をもっていて、生きる張りあいを持つために仕事を続けたいという人たちもいる。このように、定年退職後の老人たちの生きざまはさまざまであるが、今日の中国の現状からして、たとえそれが社会主義の国であるにによ、いま中国は立ち遅れた経済をたてなおすために、政府当局が総力をあげて、現代化路線を推進しようとしている最中だからである。

だからといって、一挙に理想社会を実現できるはずもないし、この定年退職の問題も、現代化路線の進展と切り離して考えるということとはできない。それと、現代の中国がおかされている立場からして、いろいろな事情を有する企業の状況と照し合わせたうえで、定年の問題を考えてみる必要があるのではなからうか。

ますます高齢化してくる企業従業員の実態をみると

き、青年層の就労を妨げ水の流れを悪くしているとするなら、規定通りの定年退職を推進して、人的資源の新陳代謝をはかることも必要となるだろう。もちろん定年以前の退職は強制できないにしても、たとえば、特殊な技術を必要としない労働者の場合は、本人の退職と引きかえに子女を就労させるといった措置も実際にとられている。一方、特殊な技術を身につけていて後継者がいない場合は、それが育つまで実質的に定年延長がとられている。いずれにせよ、今日の中国における定年退職制度は、今後政治的必要や経済の発展につれて改善されていくであろう。

## (二) 老人の福祉施設

わが国の老人ホームにあたる老人のための福祉施設として、大別すると「養老院」と呼ばれているものと「敬老院」とがある。その呼び方がちがうということは、利用者が在職していたときの職種によってちがっている。さらに前者の養老院にも運営主体の面で二通りがあつて、その一つは国営企業で働いていた労働者が多く利用

しているもので、工人退休者養老院と称している。他の一つは、各市政府がやっている施設で〇〇市養老院と呼んでいる。

敬老院の方は人民公社が運営しているもので、上海市嘉定県城東人民公社の幹部職員、甘世昌氏より入手した資料に基づいて少しく紹介しておきたい。この資料によると、嘉定県の人口は約四九万人ということであるが、人民公社が運営している敬老院はベッド数九〇のものが一施設あるだけで、その他に県の革命委員会がやっている、わずかなベッド数しかない養老院がもう一つあるだけだということだった。しかるに、人口に比して施設の面では遅れている感がある。

そこで、数少ない施設の利用度をその資料からみると、ベッド数が少々あいているというのである。少なくとも昨年までは、入所資格に制限があつて誰もがはいれるということではなかったようである。たとえば、三親等までの親族があつた場合は入所できなかったということだし、まったくの身寄りのない人たちに限定されていたようにも思われる。また解放前の資本家や地主もはい

れなかったということだが、原則的には昨年までのそれと変らないにしても、事実上はこれらの条件が緩和されてきていることも事実である。それなのに、入所者が定員に満たないで、むしろ減少気味にあるということはなにか理由があるはずである。

まず理由の一つにあげられるのは、昔からの家族主義が復活していて、家族や地域社会の住民たちとの関りもよくなってきたということである。それと、退職までの職場とのつながりで、老後保障がなされているからではないだろうか。このことは、入所者の男女の比率をみると、入所者全員のなかの、約九〇％近くが男性すなわちおじいさんで、おばあさんの占める数値が一割前後であるということからも明らかである。このことは、男に身寄りのない方が多くて、女の人に少ないことを意味しているのではなからうか。

わが国の老人ホームの場合、むしろ女性の入所者がやや多いのが普通のように思われるけれども、中国の場合これの逆である。このことにもさまざまな理由があるだろうが、入所している男の人たちのなかには、一九四九

年以前のいわゆる解放前の若い頃に、精一ぱい働いても貧しくて結婚さえもできなかった人もいる。その点女性の場合は、たとえ貧しさのために売られたり貰われたりということはあったにせよ、いった先で縁があつて身寄りができたという例も決して少なくない。それと、入所者に女性が少ないもう一つの理由として考えられることは、嫁が働きにでてしまえば、家事などをやってくれる人が必要となる。

かつての文化大革命時代の中国は、十億の人民が総力をあげて生産に励まなければならなかった頃は、生産現場の共同食堂を利用するのが普通だったが、今日ではそれぞれの家庭で炊事をするようになってきたとのことである。それにおばあさんが家を守っていてくれるなら、孫たちの面倒もみてもらえるという利点もある。

一般的な考え方をすると、こうした収容施設に入所している老人たちは、身寄りもなくどこか淋しい感じをうけるのである。しかしながら、中国の収容施設である養老院や敬老院に入所している老人たちは、長い歳月にわたってなめてきた辛酸を超越して、今は施設でのんびり

とカードをやったり将棋をさしたりしている。その老人たちの過去を振りかえれば、それこそ三度の食事もうろくにとれなかったこともあっただろうに、毎日三度の食事をとって好きなことができるということは、なにはともあれ幸せなのではないかと、入所している老人たちの顔から読みとれた。

### (三) 定年退職後の生活保障

老後保障というか、定年退職後の生活保障は、当人の勤続年数に応じて本人が死亡するまで、退休金と称する退職手当（年金）が毎月支給されることになっている。

今ここにいう退職手当の金額の割合をいうと、退職時の月給を原給与として、勤続十年以上で十五年未満の場合は六〇％、十五年以上二十年未満の勤続者には七〇％、勤続年数が二十年以上の場合には原給与の七五％が支給される。さらに、一九四九年九月三〇日の建国前の革命工作に参加した者には八〇％、一九四五年九月以前の抗日戦争に参加した者には九〇％、その他特別な貢献のあった者には、前記した勤続年数の標準に一〇％から一

五％が加えられて支給されることになっている。

今述べた勤続年数の標準は、一般の労働者と職員の場合であるが、とくに指導的地位についていた中・高級幹部、たとえば、国政や市政でいうとおおむね局長クラス以上の地位にあった者には、毎月原給与の一〇〇％が支給される。それと、ここにいる中・高級幹部および一九三八年以前の革命工作に参加した者は、定年は第一項で述べた規定と同じであるが、その地位や身分を問わず、退職休養とはいわずに離職休養と称して特別の扱いをうけている。その他、医療、住宅、政治的処遇の面でも考慮されている。

なお、一般の退職者の場合も、医療費などの保障は在職中と同じように扱われているものの、扶養家族の医療費については、在職中は半額が給付されていたものが、退職すると本人だけになってしまう。住宅については、退職後もそのまま社宅に居住することができるし、家族が増えたり新しい社宅ができた場合は、優先的に配慮されることになっている。

とはいうものの、生活水準のそれからみると決して高

いものとはいえない。それこそ最近、路線的には「四つの現代化」という旗印のもとに、いわば資本主義的な概念を導入したような実験をやって、生産が躍進して生活の面でも活気づいてきているとはいうものの、生活そのものはまだまだの感である。今年の五月に訪中して、上海市の西北に位置する嘉定県の、十九の人民公社の一つである城東人民公社を訪問したのだが、文化大革命の頃からすると、農民の生活は随分と変ってきたということだった。

人口約一、二〇〇万人といわれる上海市の郊外に位置するということもあって、食料品の供給状況もその方法において改善され、農業生産の回復も著しいものがある。穀物の収穫高にしても、一九七六年と比較して三〇％増だということだった。したがって、生産高が上昇するということは、おのずから収入も増えるということになる。生活水準が高くなるのは当然のことである。それも穀物だけの収穫増だけではなく、野菜などのいわゆる副産物が著しく増産となっている。これが四年前だったら、市内のどこを回ってみても二、三種種の野菜

と、ごくありふれた水産物しかなかったということだが、今日では青空自由市場がいたるところに開かれ、市街地の街路樹の下で列をなして売買されている。

かつては、生産された収穫作物は国营市場へ売るだけだったものが、最近では自留地でとれた農産物や副産物は自由に売買できるようになっている。それでも、わが国の農村の生活と比べると、その開きを感じずにはおれなかった。一例をとってみると、今日労働者や農民たちの足だといわれている自転車を一台中購入するとすれば、二ヶ月ないしは三ヶ月間の給与をはたかなければ買えないというのが実状である。

住宅にしてもしかり、社宅に居住することは保障されているけれども、狭い家屋に三世代が同居しているのが普通である。城東人民公社の第七農業生産隊に所属している呉惠芳女宅を訪問したのだが、父親は人民公社の幹部だということだった。家屋は二階建だったが居室は三部屋しかなく、階下は土間の食堂兼ホールと台所があっただけで、家族構成は七人ということだった。居室の調度品とてたいしたものはなく、こわれかけた簞笥の上に

ポータブルラジオが置いてあったのが印象に残っている。しかし、生活そのものは裕福ではなさそうだったが、家族間には心が通い合っているように感じさせられたし、昔からの家族主義が残っている感じがして、何か救われたような気分になったのも事実である。

#### 四 医療と衛生活動

老人医療は、今日では中国でも大きな問題となってきた。ますます定年退職者が多くなってくるにしたがって、本人は生涯無料だとしても、一般的な医療対策はまだまだこれからということである。

前述した嘉定県には綜合衛生院（病院）が一つ、医院が五軒あるだけだということだったから、その貧弱なことは押して知るべしである。とはいっても、文化大革命前に比べると進んできていることも事実で、不足している医師の穴うめをしているのは、農家の青年たちが講習をうけ、薬箱をさげて病人のところへと駆けつけている、いわゆる「はだしのお医者さん」である。

かつては、医療や衛生部門が都市の少数の人にしか奉

仕していなかったため、中国人口の絶対多数を占めている広大の農村では、医師や薬品が著しく不足していた。

文化大革命以前のことだったというのだが、農業生産隊の老婆が急病にかかり、やっとのことで医者にきてもらうことができたというのである。ところがその医者は、大きなマスクをかけて病人に近寄ろうとせず、ちょっとながめただけで、家族に「この人は伝染病にかかっている、伝染するから注意するように」といって、薬もおかずに帰ってしまったというのだ。また、医者と薬品が不足しているために、病気になってもすぐに治療がうけられず、なかには不幸にも亡くなってしまう例が少なくなかったという。その他にも、老婦人が十六日間病院に入院して、九〇元という治療費を支払ったそうだが、そのあげくに、医者から「あなたの病気は生まれつきの持病だ。治療してもよくならないから、お金があったらおいしいものでも買って食べなさい」といわれて、病院から強制退院された例もあったそうである。

こうした貧弱な医療制度に激怒した青年たちが、自分たちの農業生産隊にも自身の医者を必ずつくるのだとい



う決意に燃えて、はじめてできたのが前述した「はだしの医者」だというのだ。もちろん、こうした「はだしの医者」や衛生員が誕生してくるその背景には、プロレタリア文化大革命が進められていくなかで、政府当局の「医療・衛生活動の重点を農村におこう」という指示がなされたということである。このようなことがなければ、今日のように「はだしの医者」が成長しなかったのではないだろうか、ということが推測できるのである。

とりわけ、老人医療の立役者といえば、やはりなんといっても「はだしの医者」と衛生員であるから、今少しこのことについて述べてみたい。かくして農村社会に根をおろして住民たちに喜ばれている「はだしの医者」の隊列は、革命路線にみちびかれて急速に成長し強大な力となってきた。

嘉定県の城東人民公社は現在、農作業もしながら医者もする「はだしの医者」を六八人、農業労働をしている生産隊の衛生員を約二〇〇人育てあげ、公社全体に医療・衛生網が形づくられるまでになっていた。生産隊の住民や老人たちは「はだしの医者」と衛生員のことを、

「田畑で労働し、わしらの寝床までやってきて看病し、わしらの家までできていろいろ教えてくれる。あの人たちの話しは心からうなづける」とほめたたえている。人民公社の党革命委員会は「はだしの医者」を、公社がつくっている衛生院や市・県の病院に交替で送りこんで勉強させたり、衛生院の医者と「はだしの医者」を定期的に交替させるなどの方法をとって、政治面と技術面から「はだしの医者」の成長に関心を払っている。

現在では、ほとんどの「はだしの医者」が農村でよく見かける病気やよく発生する病気を予防する知識をもつとともに、西洋医学と漢方医学をむすびつけた方法で治療をおこなうことができるまでに成長してきている。また多くの人が新しい針療法をおぼえ、関節炎、背中や腰の痛み、神経衰弱などの病気も治療できるまでになっている。しかるに、総体的に医療面は貧弱であるにしても、述べてきたように「はだしの医者」の医療技術の水準も、たえず高まってきていることも事実である。

衛生面でもしかり、文化大革命以後は住血吸虫病も官入員の撲滅によって減少し、その予防と治療は今もなお

続けられている。訪問した人民公社の便所には異和感をおぼえたが、ハエや蚊を目にしなかったということは、衛生活動に力を注いでいる証しだとうけとめることができた。

#### (四) 孤独感を生きがいへ

老人問題を考える場合に、経済的保障、医療面の充実とならんで、どうしても切り離しては考えられないものに孤独の解消がある。中国でもこの孤独感におちいらないうで生きがいを得るためのものとして、あらゆる方法が講じられている。

とくにここ数年來の新しい動きとして、定年後もなお働きたいという人たちが多くなってきたということである。いわゆる文化大革命の頃には、果てしない職場の混乱にうんざりして、定年を待って早く辞めたいという空気が強かったが、最近は職場も明るくなって待遇も向上してきたので、もうひと働きしたいという気持ちが出てくるのは当然かも知れない。しかもなかには、経済的必  
要からではなく働きたいという人たちもいるという。つ

まり退職手当以上の報酬は要らない、それよりも生きがいを得たいというのである。

とくにこうした希望が出てくるというのは、健康と熟練した技術を身につけている、いわゆる古参労働者や管理幹部に多いようである。かれらは解放前の社会で苦難をなめつくし、解放後自分の手で工場や企業を育てあげてきたとすれば、思い切れない愛着心がわいてくるのも当然であろう。

最近市や県では、各区ごとに定年退職者委員会が設立されて、定年退職者の学習や生活の世話をしたり、もろもろの相談にのって、問題を解決したりするのが任務となっている。嘉定県の場合を例にとってみると、毎週二回の学習会を開いて、定年退職者に対して党や政府の決定を伝達したり、国内外のニュースを解説したりして、政治から見離されたというような孤独感を感じさせないようにしている。このための学習には新聞や刊行物が用意されていて、いつでも誰でも読めるようになってい  
るので、積極的に参加しているという。

その他、定年退職者の生活を援助したり、祭日などに

は慰問団を組織して退職者の家庭を訪問し、座談会や交歓会も開いている。また委員たちはつねに交替で家庭を訪問して、退職者の困っていることについて相談にのっている。体の不自由な老人のためには、買いものの面倒をみたり、理髪店や銭湯へつれていったりもする。そうした日常的なことでなく、子女が親許を離れて勤務している場合、近くのところへの転動を推進したりもする。また寝たきりの老人には、その居室を病室にみためて医師を派遣して診察をうけさすほか、近所の退職者同士が互いに助けあうようにあっせんもしている。

それにしても、現今の中国では経済条件がまだまだよくないため、一般の人たちが国外まで観光旅行をするどころか、国内観光旅行をするというゆとりもあまりない。したがってこの対策委員会では、定年退職者のために小旅行や名勝地の見学を計画して出かけている。また、劇場などでは老人たちのためによい席を用意したり、入場券は委員会が予約して買い求め、老人のもとへ送りとどけているというのである。

重労働は無理だが、やる気と能力とをもっている人た

ちのためには、たとえば公園などのような公共地の清掃や、街路樹などの手入れといった、いわゆる末端行政組織での奉仕活動をあっせんしている。なかには、八〇歳を越した人でも、町内のもめごとを調停する調停員の役目をひきうけたり、交通安全委員になって交通整理をやっている人もあるし、校外教育の補導員をやっている老人もいる。

要するに、今日での老人たちの生きざまをみるとき、それぞれの年令と健康と意欲とに応じて、孤独におちいらず生きがいがあるように配慮されているということとは、大いに見習うべきことがらではないだろうか。

## おわりに

これまで述べてきたことは、中国における老人たちをとりまく社会環境というか、外部の方からの考察であった。しかし、実際に中国を訪問して老人たちに接してみて感じたことは、肥満体の老人をあまりみかけなかったということである。

山西省大原市にある山西大学の学生楊建華君に聞いた

ことだが、中国には百歳以上の老人はたくさんいるとのことだった。そして、老人があまり肥っていないのは、老人たちの日常生活で心がけているものとして、まず歳をとるにしたがって食事の量を抑えているということだった。それと、早朝から老人の仲間たちが大勢近くの広場に集まって、猿や熊のしぐさをおりこんだ体操をやって、しばらく休んで軽い武術を練習する。そして最後に「太極拳」をやるというのだ。それも毎日（雨天の日を除いて）、おじいさんだけではなくおばあさんたちもやっているということだった。

ちょうどわが国の朝のラジオ体操と同じように、流れてくる中国古典音楽のリズムに合わせて、ゆっくりと、だが相当激しい運動だそうである。魯迅記念館を見学したとき、七〇過ぎのおじいさんが太極拳を見せてくれたが、そのものまねさえもできなかったことである。

こうして老人たちの朝の運動が終ると、気の合ったもの同士が三々五々、あちこちにグループをつくってかたまり、あるいはベンチに腰をおろして世間話である。何を話しているのか話題はつきず、八時ごろになってから

やっと帰ることもあるという。

要するに、中国の老人たちは自らでみずからの健康管理し、趣味を適当に生かすこと、たとえば盆栽や花壇づくりに精をだすことによって、生きがいのある人生がおくれるのではなからうか、ということを中国の老人たちの生きざまに学んだのである。もう一つ大事なことは、精神的安定ということである。これが健康と長寿におよぼす影響は、実には大なるものがあるだろう。ストレスや悩みごとがかさなると、血圧や心臓に負担をかけるだけでなく、消化器官の病氣と密接な関係があるということとは、現代医学が指摘している通りである。

平凡な結論となってしまったが、老後問題を生きがいあるものとするためには、ストレスがたまらないように心がけ、ノンビリと楽しく生活することが秘訣となるのではないだろうか。

合 掌

#### 参考資料

『人民公社関係年表』

『最近中国老後事情』

上海市嘉定県革命委員会

朝日新聞（一九八〇年九月八、

九日記事）